

# 人は嗜好品なしで生きられるのか

——インドネシアのイスラーム教徒を事例とした、混合研究法アプローチ——

成蹊大学 小林盾

## 1 目的

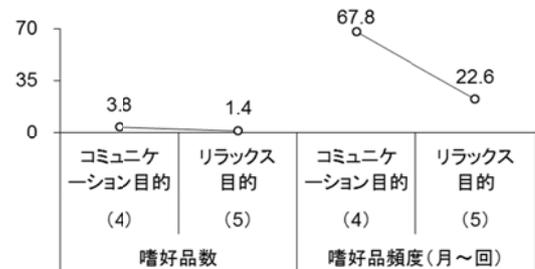
この報告の目的は、タブー（禁忌）によって特定の嗜好品が禁止されているとき、人びとがどのように嗜好品を利用しているのかを実証的に検討することにある。そのために、ここではインドネシアにおけるイスラーム教徒を事例として取りあげ、「イスラーム教徒は、飲酒が禁止されているなかで、嗜好品とどう関わるのか」をリサーチ・クエスチョンとする。もしこれが未解明のままだと、ともすれば「イスラーム教徒は嗜好品なしで生きている」との誤解が広がるかもしれない。

## 2 方法

そこで、データとして混合研究法を用いて、インタビュー調査データを中心に分析し、サーベイ調査データで裏付ける。2017年3月にスラバヤ近郊で、26名へのサーベイ調査で量的データを、そのうち9名へのインタビュー調査で質的データを収集した（インタビューの様子は図左、中央）。

## 3 結果

分析の結果、(1) インタビュー調査から、イスラーム教徒は飲酒を禁止されているが、その分積極的に別の嗜好品を楽しんでいた。とくに、コーヒー、お茶、菓子がビッグ・スリーとして人気がある。このことは、サーベイ調査でも裏付けられた。(2) さらに、インタビュー調査から、嗜好品との関わり方には2パターンがあった。コミュニケーション目的の人たちは、おもにワルン（大衆的なカフェ）で楽しみ、利用する嗜好品の種類が多く、頻繁だった。リラックス目的の人たちは、おもに家で楽しみ、種類も頻度も少なかった。このことは、サーベイ調査でも裏付けられた（図右）。



## 4 結論

以上から、イスラーム教徒は、飲酒が禁止されているが、かえって多様な嗜好品に多様な関わり方をして、多様な魅力を引きだしていた。したがって、イスラーム教徒はタブーという制約があっても、むしろ嗜好品を積極的に利用し、豊かなライフスタイルを送っていた。これらは、混合研究法でデータ収集することで明らかになった。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP15H02600, JP15H01969 の助成を受けたものです。

## 文献

小林盾, 2018, 「イスラーム教徒はどのように嗜好品と関わるのか——インドネシア人へのインタビューとアンケートによる混合研究法アプローチ」小林盾・中野由美子編『嗜好品の謎, 嗜好品の魅力』風間書房 (印刷中)。